

## ジョン・ラスキン

## 『この最後の者にも』『芸術経済論』『政治経済要義論-塵のたまもの』

『この最後の者にも』 Unto This Last[1860, book1862]

『世界の名著 ラスキン／モリス』飯塚一郎訳、中央公論社、所収

## ■ 労働の組織についての政治信条

- (1) 「第一に、全国にわたって、政府の費用で、政府の監督下に、青少年を訓練する学校を設立すべきこと。」(注：「…犯罪の節約だけでも、それらの学校の維持費の十倍以上にも達するであろう。それらの労力の節約にいたってはまったくのもうけで、すぐに計算できないほど莫大なものでであろう。）」(57)
- (2) 「第二に、あらゆる生活必需品の生産および販売と、あらゆる有用な技術の訓練のために、これらの訓練学校と関連して政府の製造工場や営業所では、権威をもって優良な模範的な仕事をし、純良真正なものを販売することにする。そうすれば、政府所定の価格を支払さえすれば、その金額に応じて、真にパンらしいパン、ビールらしいビール、そして真に仕事らしい仕事を得ることまちがいなし、というふうにすること。」(57-58)
- (3) 「第三に、いかなる男女、少年少女も、職を失った場合には最寄りの政府の学校に収容し、試験のうえかれらに適している仕事につかせ、毎年改定する一定率の賃金を支払うこと」(58)
- (4) 「最後に、老齢でかつ貧困な者には、安楽と家庭とが支給されるべきこと。」労働者は、国によってその功労をたたえられ、村から養老金を受け取り、公費によって埋葬されるべきこと。(58-59)

## ■ 情愛関係としての雇用関係

- ・「主人と召使とに、ある一定量の活力と思慮とがあるものと仮定すれば、かれらは、互いに対立することによってではなく、互いの情愛をつうじて、最大の物質的結果が得られるであろう。」(65)
- ・「不安定な状態のもとでは、いかなる情愛の作用も起こるはずはなく、ただ不満の爆発作用が起こるだけ」である。(68)
- ・対策としての「賃金の平等」：「あらゆる労働にかんする自然でしかも正当な制度は、一定の賃金率が支払われるかわり、じょうずな職人は雇われるがへたな職人は雇われないということである。／これに反して、虚偽、不自然かつ破壊的な制度は、へたな職人が半分の価格でその仕事を提供して、じょうずな職人にとってかわり、あるいは競争によってじょうずな職人を余儀なく不十分な金額で働かせることが許されるような場合におこなわれるのである。」(70)
- ・「商人の本分」は、「国民に物資を供給すること」である。「その供給によって自分に利潤をもたらすのが商人の本分ではない。」商人は、「かれの明敏さと精力のかぎりをつくして、そのもの[取引するもの]を完全な状態に生産し、あるいは獲得し、それが最も必要とされているところに、できるかぎり最低価格で分配することに努めなければならない。」(76)

## ■ よい統治

・「活動的で良く統治された国民の間では、各人のさまざまな力量がじゅうぶん発揮されることによってためされ、専門的にさまざまな要求に充当され、その種類と功労に従って報酬と権威を受けとるから、不平等ではあるが調和のある結果を生ずるのである。ところが一方、不活発な、あるいは良く統治されていない国民においては、衰退して零落していく者と、悪業（あくごう）によって栄えていく者とがあって、それがまた屈従と成功のそれ独自の不均等な組織を作り出すのである。／このようにして、一国の富の流通は人体の血液の循環に似ている。」(84)

・「…あらゆる富の究極の結果と完成が、できるだけ多くの元気のいい、眼の輝いた、心の楽しい人間を作り出すことにあるということも、おそらくわかるであろう。われわれの近代の富は、むしろこれと反対の傾向をもっているように思う。…これは重大な問題であるから、わたくしはあえて読者の熟考にまかせるのである。それは一国の製造業のなかで、りっぱな精神の人間をつくるのが結局は最も利益のあることになりはしないかということである。」(92)

・「わたくしの著作をつうじてとりわけしばしば強調した点がなにかあるとするならば、それは平等の不可能という一事である。わたくしの目的はつねに、ある人々の他の人々に対する永遠の優越ということを示すこと、そしてまた、このような人々もしくはこのようにひとりに、そのすぐれた知識と賢明な意志に従って、かれらの下級の者を支配させ、指導させ、あるいはさらに必要に応じては強制圧服させるように、かれらを選定することが得策であることを示すことであった。私の経済学の原理はすべて三年前マンチェスターで述べた『剣の兵士があるように、鋤の兵士があるべきだ』という一句の中に含まれている。そしてそれはまた、『統治と協力はあらゆることにおいて生命の法であり、無統一と競争は死の法である』という『近代画家論』の最後の巻の一文のなかに、すべて要約されているのである。」(112)

## ■ 経済学の任務：真の価値を教えること

・「真の経済学という学問は、生命に導くようなものを望み、かつ働くこと、また破壊に導くようなものを軽蔑し、破棄することを国民に教えるような学問である。そして、もし国民が幼稚な状態にあつて、真珠とか青や赤の石のかけらのような無用の長物を価値あるものと思ひ、それらを得ようとして水に飛び込んだり土を掘り起こしたり、またそれらをさまざまなかたちにカットしたりするのに、生の増進と向上のために用いられるべきはずであった多大の労働を費やすならば——あるいはもし、国民が同じように幼稚な状態にあつて、空気とか光線とか清潔といったような基調で有益なものを無価値であると考えれば——、あるいは最後に国民がそれによってなにものかを真に所有し、あるいは使用することができるような自分自身の存在の条件、たとえば平和とか信頼とか愛のようなものを市場が提供するばあいには、金、鉄、ないしは真珠と交換して損がないと考えるならば、経済学という偉大にして唯一の学問は、これらのあらゆる場合に、なにが虚栄であつて、なにが実質であるかを国民に教え、また浪費の君、永遠の空虚の君である死に仕えることが、節約の女王[すなわち健康の女王]と…どんなにちがうかを国民に教えるのである。」(123)

## ■ 富の適切な分配

- ・富の定義：「われわれが使用することのできる有用なものの所有」(124)
- ・「もしあるものが有用であるためには、それがたんに性質上役に立つばかりでなく、有用に用いる人の手中になければならない。…有用とは勇敢な人[ただしく主張・持久できる人]の手中にある価値である。したがって、この富の学問は、…分配の学問としてみるときには、絶対的な分配ではなくて、差別的な分配を論ずるのである。つまりすべてのものをすべての人に分配するのではなくて、適切なものを適切な人に分配するのである。」(126)

### ■ 富者と貧者のそれぞれの性格

- ・「需要供給の法則にのみ支配される…社会にあつては、金持ちになる人は一般的に言えば、勤勉で、決断力に富み、傲慢で、貪欲で、機敏で、規律正しく、分別があり、想像力がなく、無感覚で、無知である。そして貧乏のままにいる人は、まったくのばかで、まったくの賢人、怠け者、むこうみず、質素な人、鈍感な人、想像力のある人、敏感な人、もの知り、先見の明のない人、不意に衝動的に悪心を起こす人、無器用なならず者、公然とした盗人、まったく慈悲深く廉直で信心深い人である。」(128)

### ■ 「生」の産出としての労働

- ・「労働は生の要素を多く含むか少なく含むかによって高低の順がある。そしてどんな種類のものでも良い性質をもった労働は、肉体的力をじゅうぶんに、かつ調和をとって規制するだけの理知と感覚とをつねに含んでいる。」「労働の品質および種類が与えられていれば、その価値は他のすべての価値物の価値と同様、一定不変である。」(134)
- ・「わたくしはほとんどすべての労働は結局、簡単にプラスの労働とマイナスの労働に分けることができると思う。プラスの労働というのは生を生ずるようなものをいい、マイナスの労働というのは死を生ずるようなものをいうのである。そして直接に最もマイナスの労働は殺人であつて、プラスの労働は子供を生み、かつ育てることである。それゆえ、怠惰を中心にして、そのマイナスの側では殺人が憎むべきものであるのとまったくおなじ程度に、プラスの側では育児が賞賛されるべきことである。」(136)

### ■ 「生 (=美德)」の卓越主義

- ・「生産の真の試金石は消費の方法と結果である。生産というのは苦勞してものをつくることではなく、有益に消費されるものをつくることである。そして国家の問題は国家がどれだけ多くの労働を雇用するかということではなく、どれだけ多くの生を作り出すかということである。なぜかといえば、消費が生産の目的であり標的であるように、生が消費の目的であり標的であるからである。」(144)
- ・「生なくしては富は存在しない。生というのは、そのなかに愛の力、歡喜の力、贊美の力すべてを包含するものである。最も富裕な国というのは最大多数の高潔にして幸福な人間を養う国、最も富裕な人というのは自分自身の生の機能を極限まで完成させ、その人格と所有物の両方によって、他人の生の上に最も広く役立つ影響力をもっている人をいうのである。」(144)
- ・『「最大多数の高潔にして幸福な人間」。しかし高潔は、人数と両立するものであろうか。そのとおり、それはたんに人数と両立するばかりでなく、その必要条件である。最大限の生は最大限の徳によってのみ成就されうるのである。』(144)

・「ああ、食糧を与えられないのが最も残酷なのでもなく、それを求める権利が最も正当なのでもない。生命は糧よりまさる。富者はただ貧者に食糧を拒むばかりではない。かれらは知恵を拒み、徳を拒み、救済を拒むのである。」(147)

・「食わせてもらおう諸君の権利を主張せよ。しかしそれよりも高德で、完全で、純粹であるべき諸君の権利を、さらに声高らかに主張せよ。」(148)

### 芸術経済論——永遠の歓び[1857→1880=1981]

“Political Economy of Art”→ “A Joy for Ever and its Price in the Market” (改題)

『ラスキン政治経済論集』宇井丑之助訳、史泉房、所収

#### ■ 富としての芸術

・【富の軽蔑からの脱却】：「中世紀における善良なる人々は、富をたんに軽蔑すべきものとみなしたばかりでなく、さらに罪悪とみなしたのである。当時描かれた地獄の絵図では、首の周りにかけた財布は断罪の主な象徴の一つとなっている。これに対して貧乏の神様は…衷心(ちゅうしん)からの服従と忠実なる敬愛とをもって尊敬されているのである。それなら、かかる尊貧の感情を脱却して、そうした感情が偏頗(へんぱ)であり、誤謬であることを告白することには、実に若干勇気のいることであつた。だが、それでも是非ともそうしなければならないのである。というのは、富は人間の手に委せられる最大の力の一つにほかならないからである。そしてその力はわれわれを幸福にすることは極めて稀なものであるから、あえてこれを羨むには足りないものであるがだからといって、これを放棄したり、軽視するにも当たらない。」(10-11)

・【経済の定義】：「経済とは、公私を問わず、労働の賢明なる管理のことである。そして管理とは主として三つの意味から成っている。すなわち、第一は労働を合理的に適用すること、第二はその生産物を大切に保存すること、第三はその生産物を時宜(じぎ)に応じて分配すること、これである。」(13)

・【芸術の意義】：「…実利的要素のみが優勢で、国民が美、すなわち悦楽の芸術を蔑視して、誰もそれに従事するものがなくなってしまった場合には、それらの芸術にのみ費やされた一定量の国民のエネルギーはまったく浪費されるに違いない。これだけでも不経済であるばかりでなく、財貨の利用に関する欲情のみが病的に強くなって、たんなる蓄積のためのみの蓄積、否、むしろ労働のための労働といったような低級な欲情が、ついに、人生の静朗さと道徳性とを完全に破壊し、ちょうど放縦な奢侈や浮薄(ふはく)な歓楽を追うのと同じように、否、むしろそれよりも恥ずべき結果を見るに至るであろう。」(14)

#### ■ 家父長制支配の理想

・「…よく組織された国民の真の見本は、単に賃金で雇われて、もし労働を拒めばすぐ解雇されてしまうような雇人によって耕作される農園でなくして、真に、主人自ら父となり、僕婢(ぼくひ)一同が子となっている農家によって代表されねばならないものであろう。したがって、そのすべての農園の規定の中には、…血縁関係に基づくところの愛情と責任との堅固な紐帯も含まれているのである。そしてその[規定]中には、すべての行為も勤労も同胞

的親和によって、温かく包摂されるばかりでなく、それらはまた父権によって強化されているのである。」(18)

・「…自らを賢明に処せんと思う国民は、自己を統制する権力を確立し、それを国王なり、議会なり、法律なりに授けておかなければならない。…社会知識の進歩に伴い、われわれは当然政治を単に司法的なものに止めず、さらに父権的なものにするよう努力しなければならない。」(19)

・「賢者には力が与えられている。それは弱者をたたきつぶすためでなく、それを援助し指導するためなのである。彼の家庭にあっては、その子供らの指導者であり、援助者であるべきはずである。家庭外においても、かれはなお、父たるべきであって、すなわち弱者や貧者の指導者であり、援助者であるべきなのである。」(98)

### ■ 芸術知能の生産

・【**芸術家の発見**】：「…いかなる手段によって、ある一定の時期に、最大量の有効なる芸術知能をわれわれのあいだに生産しうるか。」→「第一は、芸術家というものはつねに発見されるべきもので、作られるべきものではないということである。」(22)

・【**訓練学校の設立**】：「それについて諸君の必要とするところは、各主要なる都市に試験的訓練学校を設けることである。そこにはいたずらで主人もてこずっている農家の怠惰な若者とか、いつも袖を上下逆に縫いつけるような愚鈍な仕立屋の小僧とかを入学させ、他の商売を習わせてみるがよい。」「この試験的訓練学校に次いで必要なことは、かれらに何かやさしい安定した職業を与えることで、これがまたすこぶる重要なことなのである。なるほど、現在の制度でも、実際に強い芸術的才能を有する少年は、概して、自分で画家となるものであるが、しかし、かれらの有する少年の精力は、大半生活の戦いのために消耗されてしまうのである。相当な画家でも、何かある職につくまでに、かれの精神は大概ひねくれ、かれの天分はゆがめられてしまうのである。ましてそれが普通人になると、定見がないので、世間の要求に身を屈し、世俗に迎合して、下手な絵描きになったりするようになるのである。ところが、偉大な人間になると、かならず社会と相争うようになり、社会はその復讐としてかれの半生を飢餓に陥れても試してみる。」(24)

・【**安定した職業の提供**】：「それゆえに、われわれが主に必要とすることは、十分な、安定した職業を与えることである。多くの青年画家が先を争って取ろうとするような巨額の懸賞金を提供することではなくして、かれらすべてにたいして、適当な生活の資を与え、その有する能力を拒絶したり、難儀することもなくして、それを十分に発揮する機会を与えようというのである。」→「種々様々の装飾に関係した公共事業」の提案。(25)

・【**紳士に仕立てる**】：「なおもう一つ青年を十分に働かせる準備としなければならないことがある。すなわち、それは高貴な語義において、かれらを真の紳士に仕立てることである。言いかえれば、かれらがその描くところのすべての事物に、最も高貴な物を見、かつ感ずるように、適当な修練を講じてやることである。」→「その作品が画家の技量によって、どれだけの価値があろうとも、国民によって、主要なる終局の価値は、人に快感を与えるとともに、人格を高め、洗練させる力いかにかかっている。芸術の至宝という名にふさわしい名画は、実に善良なる人の手によって描かれたものに限られるのである。」(28)

### ■ 芸術的才能を巧みに使う方法

・「…諸君がもし、かれら[装飾品職人]のデザインを自由に変えることを許し、かれらが従事している仕事に頭脳と情熱を働かせる興味を起こさせたら、かれらはまず、自己独特の思想を表現し、さらにその表現を完成しようと熱心になるものである。かくのごとく精神的活力はその仕事の上に効果をもたらし、生産を著しく促進し、したがって製品の価格を低廉にさせるのである。…[オックスフォードの]新博物館の建築者サー・タマス・ディーン氏はこういうことをわたくしに語っていた。すなわち、以上わたくしが述べたような原因で、多種多様の異なったデザインの柱頭飾を自由に刻ませたほうが、同一デザイン柱頭飾を彫刻させるより…約三割安くできあがったということである。」(31)

### ■ 芸術知能の経済的な使い方

・「良き芸術経済家がどんな作品についてでも、まず発すべき問いは『その芸術品が永く保存して情味を失いはしないか』ということである。」(34-35)

・「一つの俗悪な安っぽい絵に飽きたら、それを棄てて、直ちに他の俗悪な安っぽい絵を買ってくるのである。こうして一生の間、俗悪な安っぽいものばかりを見続けることになるのである。」(35)→「完全な作品を制作できる能力のある人」に、「安物」を作らせることになってしまう。

・「第二の重大なる欠陥」は「現代作家をして俗悪な絵画を制作させているのみならず、その俗悪な絵画を不良材料に描かせているということである。」(37)→「官営の絵具製造工場」設立の提案。

・「一時の流行を追って、年々多量の思想と労働とを消費させる習慣」に対する批判(39)。→「諸君が再びこれら古名匠の諸作に匹敵するような名品を得たいと思うならば、たとえその形が不幸にして旧式になろうとも、まずそれを保存しなければならない。諸君はそれをむやみに破壊したり、溶かしたりしてはならない。そのようなことは、決して経済というものではない。これ以上の芸術知能の浪費は、いまだかつてないものである。」(40)

・「われわれが利己的でバカな人間であるか、それとも道徳的で思慮深いかという差異は、ただ金を使ったということだけでは判らなく、その金を使った目的物の正邪善悪によって、初めて判別されるものである。」(42)

### ■ 芸術の保存と価値

・【世代間の継承】:「生者と死者とのあいだには、産業ということに関して、不断に交換されるべき二つの大きな相互の義務が存在している…。われわれが生きて働いている間は、われわれの後に生まれてくる人々のことを常に考慮してやらなければならない。…われわれが死んだときは、次の世代の人々は、感謝と追憶の念をもって、そのことが彼らに必要がないと感じたときでも、それを邪魔者にしたり、破棄したりせずに、われわれのこの仕事を受け継ぐのが、かれらの義務である。」(58-59)

・「この世における最善の物や財宝はすべて、一時代だけで生産されるものではない」(59)

・【保存の誇り】:「…望ましいことは、ただ低級な芸術作品を生産する代わりに、偉大なる芸術品を保存することに誇りを感じることである。」(65)

・「誇示欲と利己心という二つの動機」は、「決して諸君に進めるべき事柄ではない。ただ一つ諸君にたいして勧めるべきことで、しかもこれをなすのが正しいと思われるのは、英国人が海外で財産をもち、かつ外国人の状態を改善することに努力するのが、英国の富がわれわ

れに課する最も直接的な義務の一つだということなのである。」(66)

・【**芸術作品の価格①**】：「第一に、諸君はわが政府が大金を投じて、新たに一つの絵画を買い入れたことを聞いて、決して不平を言ってはならない。現に、欧州には文字通り真に無限の価値を有する名画で、滅亡の危機に瀕しているものがたくさんある。この類の名画の価値といえば、ただそれを手に入れて、その破滅を救うのに必要な費用だというより外に評価のしようがない。」(73)

・【**芸術作品の価格②**】：「現代画家の作品の価格は、決してその中に含まれた労働量、すなわち、その中の価値を表現するものではなく、否、表現できないものであることを常に記憶すべきである。多くの場合、その価格は、その国の富者階級が、その絵を得ようとする所有欲の程度を表現しているのである。富者階級が、一度ある特定の画家の作品を所有することは、その『人格』を高めるものだと夢想するようになれば、かれの作品は天井知らずに値上がりして、数年間はその程度は維持されるものである。だからそうした値段で買い入れたところで、…ただ虚栄の競争に勝敗を争うというのにすぎないのである。これ以上の、もっと悪く、もっと無駄な金銭の使い方はないのである。」(83)

・【**絵画の購買方法**】：「この絵画購買の問題に関しては、絵の値段を合理的な水準に引き下げておくことよりも、いっそう重要な点がもう一つある。それは諸君が絵画に対して支払う代金は、生存者の手に渡すべきものであって、死者の棺（ひつぎ）の中に注ぎ込んではないということである。」(84)「諸君は現存画家中に、真に自分の愛好するものはないかと探し求めて、それを買うならば、まだ生存中の誰か天才を援助することになる。」(85)

## ■ ギルドと芸術

・「私は国家的繁栄の法則がわれわれによく判るようになるに従って、われわれは、社会的な、公開的な諸組織の確立にますます努力するようになるだろうと確信している。そして、これらについてなすべき第一の手段は、…重要と思われる各種産業のすべてにわたって、ギルド組織を再建することである。すなわち、ある特定の産業を主要産業としている国内枢要な都市のすべてに、その従業員のために、一大顧問会館もしくは、公立会議所といったものを建てて、それに他の諸小都市の下級顧問会館を従属させておくのである。そしてその会議所には、それに附属した職員がいて、その商業に従事する各労働者の状態を調査するのを第一の務めとする。」(94)

・「各会館を飾る絵画や、装飾品は、その会員に対して、その職業の価値あり、名誉あることを示すにふさわしいようにとくに努めなければならないと思う。というのは、現代社会の最も悪い徴候の一つは、承認の品性がきわめて下劣で、かつ非紳士的であるのは、必然的にやむを得ないという観念だ、と私は信ずるのである。商人というものは…怠惰な無色な人間よりも、はるかに紳士的であるべきはずのものと信ずる。そして私は絵画、彫刻などをもって、各種同業組合の議事堂に、その職業所属の人々が国家に対して尽くした過去の功績を記録し、そして商業や文明の進歩に多大の貢献をなしてきた人々の肖像を残すとともにその生涯の重大事件を記録しておくことは、じつに芸術の高貴な事業だと信じている。」(95)

Munera Pulveris [1862→1870=1981] 『ラスキン政治経済論集』 宇井丑之助訳、史泉房、所収

### ■ 経済学の目的

- ・「…蓄積の賢愚は、…すべての経済の目的、すなわち、生命の伸長のために使用されたか否かによってのみ決定できる」(286)。
- ・「経済学の目的は、生命のみならず、健全にして、幸福なる生命の持続にある」(287)。
- ・「その人の品性が、一代二代と子孫に伝えられるならば、完全なる人種の区別が、そこに生ずる。道徳的ならびに肉体的特質は、教育によって、進歩発展させられる以上、子孫によって伝智されるものである。」(287-288)
- ・「われわれは経済学の目的を『最高水準における、人生の増殖』であると、さらに定義しなければならない。」(288)「美と知性の優れた最高の形態の少数の人」＝「最も高尚なタイプの人」を決定する。→「そうしたクラスのできるだけ大多数の人々だけを支持することを目的とすれば、次のクラスに属する健全な大多数の人々もまた、必然的に出現してくるにちがいない。」(288)

### ■ 価値と富

- ・【価値(=効用)】:「生命を維持するための物の力」。「物の生命賦与力」。(293)
- ・価値においては、「固有価値」と「有効価値」の二つが重なっている。
- ・「固有価値」とは、生命支持に対する物の絶対的な力である。
- ・「有効価値の生産には、常に、二つのものを必要とする。第一に、本質的に有用な物の生産であり、つぎには、それをを用いる能力の生産である。固有価値と受容能力が、共に相合する場合には、『有効価値』、すなわち富が存在する。固有価値も、受容能力がないところには、有効価値はない。言いかえれば、富は存在しないのである。馬はわれわれが乗ることができなければ、われわれにとって富ではないし、われわれが視ることができなければ、絵もまた富ではありえないし、いかに高貴な物があっても、高潔な人格以外のものには、富とはならない。」(294)
- ・「一国の財産の総量と通貨の力はともに、富の所有者の品性と数とに従って、刻々に変化するのである。そればかりでなく、種類を異にした富の所有者の品性によって、比率および態様を異にした変化が起こってくる。」(312)

### ■ 労働の否定

- ・「わたくしは既に、労働とは人間の生命とその反対物との『闘争』であると定義した。文字通りにいうならば、それはなんらかの努力によって引き起こされる人間生命の『喪失』すなわち、損失または、失敗の量である。それは常に、努力そのもの、または、力の適用(つまり仕事[opera: オペラの原義は仕事])と混同される。けれども、努力にはレクリエーション、あるいは、快樂の形にすぎないものがたくさんある。人体の最も美しい、いろいろな行為と人智の最高の諸成果は、まったく、非労働的、否、気晴らし的な努力の状態または成果なのである。けれども、労働は努力するのに苦痛がともなうものである。それは否定的な量であり、または敗北の量でもあって、それはめざましい働きに反するものとして計算されなければならない…。一言で尽くせば、それは『われわれがその中に死んで行く労苦の量』で

ある。」(324)

### ■ カリス（めぐみ）による統治

・取引においては、「忠実」でなければならない。利潤ではなく、たんなる「報酬」を求めらるのでなければならない。(372)

・「高利に対する最終的抑止案は、結局国民性を根本的に浄化するというでなければならない。」(373)

・「真の商業には『利潤』というものがないように、真の商業には『販売』というものがない。販売という観念は、めいめいお互いに他方をだしぬこうと努力する敵同士の相互取引のそれなのだが、商業とは友人間の交換であって、正しい交換が唯一の願望である点は、ちょうど同一家族の成員間の場合と同じなのである。」(374-375)

・「[『ヴェニスの商人』で教えられる]この道徳律は、『賃金』“merces=wages”の法則と性質のかわりに、それよりさらに大なる慈悲(マーシー:mercy)の法則と性質が宣言されるのだが、この慈悲はなんら拘束を受けず、慈雨のように降り注いで、与えるものも、受けるものも、ともに祝福するのである。そしてこの『マーシー』とは普通の場合の『あわれみの心』“misericordia (miserere = pity(v) + cor = heart)”という意味ではなくして、『感謝(gratitude)』によって報いられるあの大なる神の『めぐみ(gratia)』を意味していることを注意していただきたい。」(375-376)

・「『メルケス』すなわち報酬によって答えられるばかりでなく、『メルシ』すなわち感謝をもって答えられるもの」→「これこそ実に、あの『めぐみとあわれみと平安』の大なる祝福の意味である。」(376)

・「『恵み(カリス)』は、一方においては、『愛(カリタス)』となるのにもなって、他方では、それにもまさって、chara すなわち『歓喜(joy)』ともなる。あるいは、むしろ、これこそまさに慈愛の母の乳ともなり、母がいつくしむ幼児の美にほかならないのである。なんとなれば、神はけっして苦痛や争いごとから永続的『愛』やその他のよきものをもたらさなくて、歓喜と調和からこれをもたらす給うものだからである。」(379)

・「『恵み』が行動の『自由』へと移行するので、『恵み』は『自由(Eleutheria)』すなわち『自在』となるのである。この自由の形態は、近代語における『自由』として理解されているものとは、まったく奇妙に、しかもはなはだしく異なったものであって、実際は、むしろ若干の人々が隷属と呼んでいるものにずっとよく似ているのである。というのは、ギリシャ人はつねに自由をもって、第一に自らの官能の法則…からの解放なりと理解したもので、これこそ完全な自由——《セイレーン\*から安全であるというだけでなく、帆柱に縛られるということもなく》また、官能に抵抗する必要もなく、かえって官能をして己におもねらせ、従属させるという意味で完全なのである。」(380)

・[注]【セイレーン(Seiren)】:「ギリシア神話においては、上半身が人間の女性で、下半身が鳥の姿をしているとされている海の怪物。」「海の航路上の岩礁から美しい歌声で航行中の人を惑わし、遭難や難破に遭わせる。歌声に魅惑されて殺された船人たちの死体は、島に山をなしたという。」「ホメーロスの『オデュッセイア』に登場する。オデュッセウスの帰路の際、彼は歌を聞いて楽しみたいと思い、船員には蠟で耳栓をさせ、自身をマストに縛り付け決して解かないよう船員に命じた。歌が聞こえると、オデュッセウスはセイレーンのもとへ行こうと暴れたが、船員はますます強く彼を縛った。船が遠ざかり歌が聞こえなくなると、

落ち着いたオデュッセウスは初めて船員に耳栓を外すよう命じた。」(Wikipedia より)

・「そして、いかなる人間でも、どんな国民経済の組織においても、真実の役割を果たすように、他人を支配することができるのは、ただかかる度量の寛(ひろ)さがある場合にかぎられる。そしてまた、一方においてはこの「自由(Eleutheria)」すなわち仁愛という型、他方においては、これとまったく反対の「隷属(Douleia)」すなわち強い悪意という型以外に上流と下流の永劫不変の階級的区別はない。以上二種類の間階層の分離と上流階級による下層階級の確固たる支配は、その《真実》の自由人と「軽蔑すべき俗衆“maliguum spernere vulgus”」とを識別する能力である。」(380)

・「それゆえ、『恵み(カリス)』のこの形の研究は、われわれを統治一般の諸原理の論議、殊に、富者による貧者統治の原理の議論にまで導くのであって、われわれは、どのようにして『偉大さ』と結合した『恵み深さ』、あるいは『威厳(マジェスタス)』と結合した『愛』というものが、どのようにして、『王』のあらゆる形相にともなった、真実な『神の恵み(デイ・クラティア)による』権利、すなわち『神権(divine right)』となるのかということを見出すことである。」(381-382)

#### ■ 賢者による統治

・「…すべての形態の政府も、それがつぎの一つの根本的な政策要求——すなわち、その人数の多寡を問わず、賢明で親切な人々が、賢明でなく、不親切な人々を治めるべきであるということ——を達成するかぎり、公正にして良いものだし、またこれを達成できないか、あるいはこれに逆行するかぎりにおいては悪いものなのである。」(403)

・「…自分自身がより賢明になってゆくことを立証されるにつれて、いっそう大きな発言権をもつべきである。二十歳で一票の投票権をもつとすれば、三十歳では二票、四十歳では四票、五十歳では十票をもつべきである。」(407)

・「隷従というものはそれ自身悪でもなんでもなく、ただ、それが乱用される場合に限って悪となるにすぎないだろう。」(408)

・「人を泥棒になるまで怠惰のままに放っておいて、後になってから鞭打つよりは、かれを仕事に向けて鞭打つほうが一層よく、また一層親切である。すべての人類にとって、緊要なことは、正しい行ないをさせるように仕向けることである。そうさせる方法は——楽しい希望によってか、あるいは逼迫した要求によってか、感動させるような演説か、それとも鞭によって行なうかは、比較的重要なことではない。」(409)

・【支配する富者と服従する貧者の関係】：「賢明にして先見の明のある人は一生懸命働き、少ししか消費しないで、貯蓄ができる。思慮のない人物は、少ししか働かないで、かれの生産したものはみんな消費してしまい、少ししか蓄えができない。」(418)→「後者[貧者]は思慮深い人に急所を握られて、自由に操られることになる。(419)→「隣人たちを怠けさせたまま扶養することは、かれの破滅ばかりでなく、隣人たちの破滅でもある。かれは隣人たちを扶養するかわりに、その代償として、かれらに仕事を要求するだろう。それが親切であろうと、冷酷であろうと、隣人たちが与えることのできるすべての仕事を要求するだろう。…この選択にあたってかれの知恵次第によって、かれの主人たる価値があるかないかがきまる。」(422)

・「一部の地方では、不健康な土地、悲惨な住居および半ば飢餓に瀕した貧乏人が見られるが、他の地方には、よく整理された地所、扶養よろしきをえた召使、それに高度に教育され、

奢侈的な生活をしている上品な生活状態が、みられることになるであろう。」(424)

・「裕福」とは、「奴隷の主人」となることを意味する。(424)

・【貧者を雇うのに考慮されるべき三つの事柄】：「かれに職を与えるだけでは、充分ではない。まず第一に、諸君はかれを有用なものを生産するために雇うのでなくてはならない。第二には、かれがひとしくうまく生産できる数個の物…のうちで、諸君がかれを最も健康的な生活をおくることができるような物を作らせるのでなくてはならない。最後に、生産された物のうちで、どれだけ諸君自らがとりそしてどれだけを他人に残すべきかという知恵と良心の問題が残っている。…相当多量のものつねに、いずれの時か譲渡のほうに振り向けなければならないものである。」(430)

### ■ 賢明な生き方

・【貧者として死ぬこと】：「賢明な生活の法則は、金銭の儲け手はまた同時に、その使い手でもあるべきで、かれが死ぬ前に、ほとんどすべてを消費すべきだということ、これなのである。それゆえに、経済家としての真の野心とは、所有の退潮を、生命の退潮に正しくおだやかに比例させながら、計算して、富者としてでなく、できるだけ貧者として死ぬということではなければならない。」(431)

・【自由時間の確保】：「…人は食べ物や自分の身体について節度を守ることは、義務と考えるが、自分の財産や精神について節度を守ることは少しも義務とは考えない…。かれは自分の青春や肉体をぜいたくのために浪費してはならないことは、わかまえているが、しかし自分の老後と自分の魂を金銭のために浪費して、しかも自分は間違っていないと見え、知性のアル中患者的症状が疾病だとは知らないのである。けれども、人生の法則は、人間が日々食べたいと思う食べ物と同じように、年々儲けたいと願う金額を確定すべきであって、限度に達したらとどまって、事業の拡張を中止して、それを他人に任せ、そうしていつそうすぐれた思想を求めて、適当な自由時間を確保すべきである、ということである。」(432)